

5. きらめく動物たちの命と海 【久保田信の白浜だより(その20)】

2011 年、白浜の京都大学瀬戸臨海実験所構内とその付近で大量の オカヤドカリ類が出現

天然記念物オカヤドカリ類は世界の熱帯・亜熱帯に 15 種生息するが、その内の約半数の 7 種が我が国に生息する。日本での自然分布の地理的北限はわが紀伊半島である。過去 10 年で紀伊半島では古座、紀伊大島、すさみ、田辺市で出現した。しかし、田辺市の記録は状況からみてペットの逃亡であろう。

著者の常駐する和歌山県白浜町では、オカヤドカリ類の古い記録があり、越冬も観察されている。京都大学瀬戸臨海実験所が保管する標本の中にも、恐らく 1950 年以前に瀬戸（白浜町）から取られた大型のオカヤドカリ類の液浸標本がある。

ながらく白浜周辺海域からオカヤドカリ類に関する報告は途絶えていたが、ムラサキオカヤドカリが、2011 年に瀬戸臨海実験所構内やその付近で多数出現し、その年の 11 月下旬までに番所山で 120 個体以上マーキングし、構内および実験所付近でも 110 個体以上にマーキングした。特筆すべきは、瀬戸臨海実験所南浜で、少数例ではあるが、幼生を夜間に本州で初めてリリースするのを目撃できた。実験所付近でこの行動がみられても、奄美諸島以北の地域なので、残念ながら再生産につながらないとされているので、無効分散となってしまうのだろう。

一方で、南方より黒潮に乗って幼生が運ばれてきており、現に北浜でも年によって大量

の幼体が出現したことがある（2006年）。そこで、実験所北浜でオカヤドカリ類の定着したばかりの幼体の出現を調べていたところ、2011年10月中旬に2回だけだが、少数ずつが発見できた。北浜の船着場の石組みの間とそこに沿った砂浜の上を元気に這いまわっていた。甲長は大きいもので4.1 mmで、宿貝はミクリガイだった（図）。これらは採取して県と町の許可（指令文第120(3)）を得て飼育中である。

悲しいことに、北浜や番所崎には彼らが成長したときに背負う大きな貝殻が不足している。彼らは、しかたなく、水族館飼育展示で不要になってゴミ捨て場に積み上げられたものから大きなサザエやハリサザなどの貝殻を探し出して、活用している。夜な夜な美しい紫色をした大きな紫オカヤドカリが宿替にやってくる。マーキングしていると、同じ個体が何度も出現することがわかる。彼らは、ヤシガニほど大きくはならないが、灌木に登って昼寝をすることもある。

そろそろ今年も終わりで12月中旬だ。北西の冷たい季節風も吹きすさぶ。無事にかれらは大きなものもごく小さなものも、冬越しできるだろうか？



図. 2011年10月中旬に瀬戸臨海実験所北浜に出現したオカヤドカリ類の定着したばかりの幼体（最大個体）